

『#モンテ・クリフト伯』（アレクサンドル・デュマ著）を少年少女向け簡略板で読んでみた（これでも 900 ページ）。1844 年から 1846 年にかけて、フランスの当時の大手新聞に連載され、同じく 1844 年から 1846 年にかけて 18 巻本として出版された。日本では『巖窟王』の題名でも知られている。

主人公のエドモン・ダンテスは、素朴な船乗りの青年で、愛する女性と婚約し幸せな日々を送っていたが、ある日無実の罪をでっちあげられ、自分では状況が理解できないままに、恋人と引き裂かれるようにして、監獄に送られてしまう。送りこまれた先は脱出不可能という監獄で、次第に生きる気力さえ失い、断食で、餓死寸前の状態に陥る。だが何のめぐりあわせか、獄中で賢者のごとき神父と交流できたことで、自分の身に降りかかったことのカラクリや罫にはめた者たちが誰だったのか理解できるようになり、復讐への強い思いがダンテスを生き延びさせる。14 年にもおよぶ獄中生活に耐えた後、脱獄に成功し、姿を消す。

それから 9 年後、社交界は謎めいた貴族「モンテ・クリフト伯爵」の噂話でもちきりとなっている。実はそれは、賢者から与えてもらった情報をもとに巨万の富を手に入れ、すっかり紳士となったエドモン・ダンテスだった。伯爵は、誰にもダンテスとは気づかれぬまま、かつて彼を陥れた者たちへと巧みに近づく。そして、ひとりまたひとりと、復讐を果たしてゆく。

陥った罫を理解するには、時代背景の理解が必要である。ナポレオン派と王党派が権力争いを行っており、その当時負け組であったナポレオン派の連絡係であるとでっち上げられ、投獄されたのであった。

今考えると設定にかなりの無理がある。牢獄の中で数か国語を話す賢者とトンネルを掘って、毎日行き来しながら交流し、教養を身に着けた（暗闇の中の会話だけでは不可能だろう？）。死んだ賢者の死体にすり替わって脱出する（このアイデアは後世の作品に多数採用されているそうだ、黒澤明監督『用心棒』、『ヤング・インディ・ジョーンズ』等）。何よりも現実離れしているのは、賢者の残した地図を元に手に入れた財宝の額が数千億円を超えるものであることだ（国家予算に匹敵する？）。これを基に、全く働かずに伯爵に変身して（伯爵名は財宝のあった島の名前に由来している）、14 年間の牢獄生活に対してダンテスを陥れた 3 名に復讐を果たすことである。無尽蔵の金を持てばなんでもできるのではないか。そう考えてしまうと、どうやって復讐するのかに興味が移ってゆく。

本作は、長大で冗長な部分が多いので、少年少女向けのダイジェスト版がお勧めのようだ。

数多くの翻案小説や縮約版小説の出版、映画化、演劇・ミュージカル上演、漫画・アニメ化などがなされている。作品設定は、原作におおむね沿ったものもあれば、時代舞台が大幅に変更された大胆な翻案まで、多くのバリエーションがある。

復讐小説を検索すると、『モンテ・クリスト伯』、『ハムレット』（ウィリアム・シェイクスピア著）、『キャリー』（スティーヴン・キング著）学校でいじめられていた少女キャリーが、その特殊能力を使って壮絶な復讐を果たす現代的なホラー小説、『復讐の誓い』（ジョン・グリシャム著）法律と復讐が絡み合うスリラーで、人種差別と司法制度を背景にした緊張感あふれるストーリー、等が挙がる。機会を見つけて読んでみよう。